

袖ヶ浦市谷中でご両親と施設で鉢花を生産している齊藤健太郎さん。最初はあまり家の農業に興味がなかったものの、先進農家での研修を通して鉢花生産の魅力を感じるようになり、平成14年に就農しました。

春は花壇苗、秋はポット菊、ポインセチアを主に生産し、現在「サンパラル」「プリンセチア」といった新しい品目も取り入れています。健太郎さんは作業全般に関わっていますが、特に新しい品目や、ポインセチアを担当し、市場や周囲の生産者との情報交換も積極的に行っています。

経営に対しても自身の考えを持っていて、需要に合った価格で商品を生産し、販路を開拓することが重要だと感じているそうです。そのため、季節に合った商品を生産を心がけています。「サンパラル」は母の日のギフトとして注目が集まっ



新品目の「サンパラル」

ていて、春から秋まで花が咲くことが魅力です。また、つる性でグリーンカーテンにも利用できるそうです。10月から出荷できる「プリンセチア」は、売り上げの一部がピンクリボン運動に寄付されます。ポインセチアと出荷の時期が重ならず、労力を分散させられることも生産する上での魅力です。資材費は高騰、商品価格が下がるという厳しい状況ですが、「今が一番苦しい時期ですが、確実に乗り越えて、自分の思い描いていることに挑戦していきたい」と、力強く抱負を語っていただきました。

(柏崎)

消費者に求められる鉢花生産を目指して

袖ヶ浦市谷中 齊藤 健太郎さん

スーム
アツブ
アグリ

耕畜連携による水田の有効活用

～富津市における稲WCS生産・利用の取り組み～



エサができました

稲発酵粗飼料(WCS)の生産が水田活用の戦略作物として位置づけられ、推進されています。富津市では昨年からは肉牛農家と水稲農家が連携して、稲WCSの生産・利用が始まっています。

昨年は3戸で約2.3haの栽培でしたが、今年は、近隣の水稲農家が加わって6戸で約6haに拡大しています。そのうち6割では、茎葉の収量が多い飼料用の中生品種「たちすがた」を作付けし、草丈が約1.5m、10a当たり約1.2tの乾物収量となりました。

理作業を水稲農家が行い、収穫以降の作業を肉牛農家が分担しています。水稲農家からは「収穫以降の作業がないので労力が削減できる」と好評です。また、機械は水稲用と牧草用の既存ものを活用しています。

収穫は食用米の収穫期よりも早い糊熟期から黄熟期に行います。モアで刈り倒した後、予乾し、ロール状に丸めてラップフィルムで密封して、1か月程度貯蔵した後、肉牛の飼料として利用されます。また、稲WCSの収穫後には飼料作物のスターダングラスを作付けして二毛作を行っています。



もお～おいしい～♪

今後両者の連携による、水田有効活用が期待されています。(田仲)